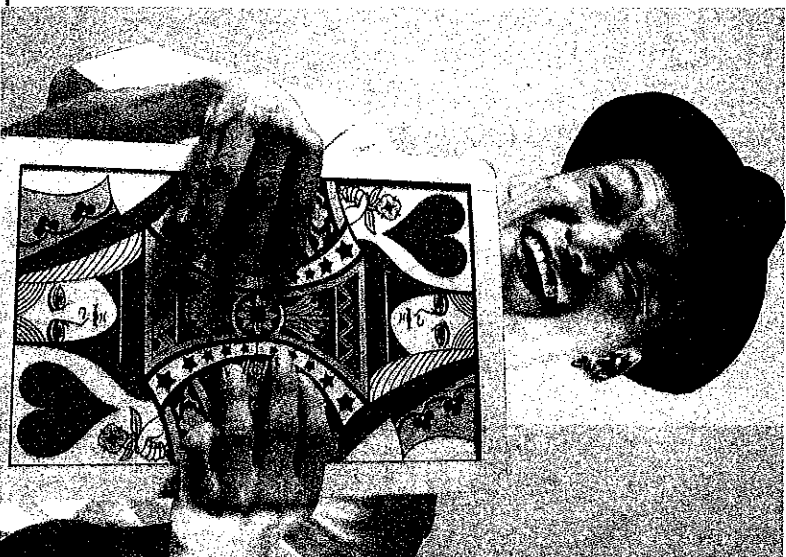


「笑」の「人」

障害がある人、人を楽しませることはできないだろうか。如い頃からそう思ってきた。動かない。でも、音楽が大好きでバンドを組み、ステージにも上った。それなのに、観客は涙ぐんだり、拜んだり。「障害に負けずに頑張ってね」。何度声をかけられたことだろう。講演を頼まれると、チートは



人権問題。冗談を言っても、会場で見ほしいのに」そんなストレスを抱えていた7年前、手品に出会った。ユーモアあふれる語術やパフォーマンスに、観客は腹を抱えて笑っていた。「自分があじがれる光

殺伐とした世の中、笑いで吹っ飛ばす

裏だ。プロの手品師に師事し、5年かけてデビューした。補助者なしに舞台は成立しない。それを逆手に取る。例えば、ギロチンマジック。観客に高さ50センチの台に腕を入れてもらい、刃を下ろす作業もやってもらう。そこで一言。「僕は手を下しません。何が起きても責任は取りませんので」

笑いが起ると、観客との距離が近づく。それが何とも楽しい。人を笑わせ、自分も大に笑う。手品を続けているうちに、てんかんの発作もなくなった。不思議がる医者をよそに、「笑いはリハビリにもなる」と医話がない。

「今の世の中、殺伐として笑えない。それを自分の笑いで吹っ飛ばす」。出演依頼が来るたび、自信を深めている。文・石橋肇

障害者のマジシャン

「Mr. Handy (ミスターハンディ)」

森 裕生 さん 28 (福岡市南区)

南区出身。トラソノブや炎を使ったものなど約20種類の持ちネタがある。NPO法人「博多笑い塾」のメンバー。好きな言葉は「一生楽笑」。点字名刺の製作・販売や印刷業なども営む。